

座談会の編集を終えて

なにげなく語られる綾瀬小学校旧職員の先生方の一言ひとことに、戦時を生きた師の重みを感じた。

当初この座談会では、集団疎開を受け入れた綾瀬小と疎開校である諏訪小とがどのような協力関係や係わりがあったかを探ることが主眼であった。

話を聞き進む中で、戦時下の現状がわかるにつれて、両校のひんぱんな協力関係が難しいということもわかってきた。

二部授業のための教室提供や体錬会(運動会)での校庭の使用や見学、そして学期1回ほどの常会(職員会議)での先生たちの交流等に限定されていた。

当時綾瀬小は、縁故疎開と厚木航空隊の工事にもともなう児童の急増で学校や先生方はその対応で手いっぱいだったことは想像できるところである。

一方、疎開校の諏訪小は宿舍を中心に自校の教育計画による授業と、決められた生活日課によって寮長を中心に

共同生活をしていた。

少人数の先生で教育や生活指導、そして毎日の食糧の手配などで気の抜けない毎日だったと推察できる。

また、疎開の子どもたちが綾瀬小まで往復するのは大変なことだし、途中の安全確保という面からも危険が十分に予想される。必要以上の連携は、むしろ負の要素を大きくするのではないかと考えられる。

むしろ、座談会・聞き取り・記録写真や資料を通して空白になっている終戦間近の学校(先生方や子どもの様子)や地域の様子の一端が明らかになったことは、大変貴重であり、意義あることだろうと確信している。

学校は地域のセンター

当時の学校は、子どもの教育の場であることは勿論のこと、青年たちの教育の場としても機能していた。

住民への啓発活動の場としての役目も担っていた。

出征兵士の壮行や戦死者の慰霊の迎

えも学校で行われ、必要に応じて児童も参加した。

学校は、行政の情報や教育文化を発信する重要な役割を果し、地域からも信頼されていた。

終戦間近になると男の先生のほとんどが応召されて、学校を守るのは女の先生だった。

日直は、日曜日を含めて毎日。宿直学校へ泊る(も男性と複数の女性教師。女性だけの場合は3人で当たるなど、女性教師が学校管理の中樞を担うことになる)。

学校は、住民への窓口として地域に向けて開かれていた。

勤労重視の教育

食糧が極度に不足し、配給による統制が敷かれたこの時期は、学校でもそれを補うための協力が要請された。

農繁期には、子どもも労働力の担い手として家事・農事の一部を助けた。

学校では、学年相応の勤労動員が課せられた。

いなご取り、どんぐり拾い、高学年は農家の収穫作業の手伝い。高等科の生徒は、暗渠(あんきよ)排水作業の手伝いや麦の取り入れ等。疎開児童も近くの農家の畑を借りていも類の栽培をした。

水田づくりの話の中で、ぬたり田のク口(あぜ)を子ども達が手でやったのではないのかとか、鍬(くわ)を使わないで「足耕」といって足で田んぼをやわらかくしたのではないのかとか、興味深い話も聞くことができた。

当時は、体験的な実践活動が家庭や学校でも主流であった。今ここへきて教育の中で体験活動が重視されてきたことは、また別の視点から考えさせられるところである。

マンモス学級の出現

国の疎開政策の推進と相まって、綾瀬の縁故疎開者も増えてきた。厚木航空隊の工事関係による児童の転入とあわせて綾瀬小の児童数は急増してくる。疎開児童数は200名近くに達し、

1クラス85人というマンモス学級もできた。特別教室の机、椅子を使ってもなお対応が難しく机間巡視どころか、教室はすし詰めで身動きがとれない状況だったという。

髪の毛長い子ども多く、手持ちのバリカンで散髪をした先生もいた。学校の先生方は多忙の毎日だったという。

今の1クラス40人学級(実質30人)からは想像もできないことである。

子どもは遊びの名人

物不足の中でも、子どもが何人が集まれば遊びが始まる。勤労動員で出かける「いなご取り」や「どんぐり拾い」は外での楽しいひとときでもあった。

男の子は戦争ごっこ、陣取り、字かくしなど仲間と楽しんだ。戦争に使っていた飛行機や軍艦の名前を覚え、遊びの中に取り入れる子どもいた。

竹馬や紙玉鉄砲を作ったり、葉っぱを使った遊びなどもあった。

女の子は女同士で花いちもんめや縄とびで遊んだ。ジュズ玉を入れた手づ

くりのお手玉やあやとりなど、子ども達には喜ばれた。

戦争という厳しい時代を過ごしてこられた先生方の話を聞きながら、実直で献身的に学校を支えた先生方の姿や、意欲や明るさを失わない純な子ども達の姿に感動を覚える。

地域の方々の疎開児童への温かい心配りにも何かホツとした思いがする。

物は極度に不足していたが地域に生きる人々には豊かな心があった。

最後になりましたが、座談会や聞き取りでお話いただいた先生方を始め関係者の方々、貴重な写真等を提供くださった最上満先生、斉藤光弘氏、横須賀市教育研究所の方々に厚くお礼申し上げます。